

【水の作文大賞】

あの日誓った私の「役目」

熊本県 氷川町及び八代市中学校組合立氷川中学校 三年 本山 芽唯

「地震が発生しました。」テレビの地震速報のテロップを見るたびに思い出す。あのまた大きな揺れがくるのではないか。家が崩れるのではないか、と心配し、不安な日々を送っていた六年前。

今から六年前、私たちは熊本地震という大きな災害に見舞われた。この地震がおこるまで水について深く考えたことはなかった。

地震直後、九州七県で最大四十四万五千八百五十七戸で断水、そのうち熊本県では三十三万戸。一カ月たった五月十四日時点でも、約二千七百戸も断水していた。断水をした直後は水のことではなく、地震、避難するべきか、などのことで頭がいっぱいだったため水が出ない、という実感はまだなかった。次の日の朝、避難所にいた私は、いつものようにトイレに行こうとすると、トイレが使えなくなっていた。「どうして」「なんで」と思った。他にも、避難所にあったカップラーメンも食べることができない。そこで私はやっと水の大切さを身をもって感じる事ができ、気づかされた。今まであたり前のようにトイレをし、水を飲み、食事をし、お風呂に入る生活をしていたが、それはとてもめぐまれていたこと、あたり前ではないということを実感した。

その後、避難所に給水車がきて食事やトイレなどをすることができるようになった。ただ、テレビの中継では私の地域よりもっとひどい被害をうけている地域があり、まだ給水が行われておらず、断水も続いていた。その地域は電柱がたおれて、電気が使えない。もちろん、水道もストップ。自分の家がくずれて、泣いている人々がいた。「自分の地域と全然ちがう」私たちはまだましな方なんだと思った。

この地震で、今までの生活はあたり前ではないことや、水の大切さに気づいた人はきつとたくさんいるだろう。

私が住んでいる氷川町では、今水田に水がたっぷり張られている。

その脇を多くの水路が流れている。初夏の日差しをうけて、キラキラと光る水面。夏にはすずしい風がその水面の上をふいていく。やがて黄金色の稲穂が実る。毎日の部活動後に飲む水のおいしき。そんな日常の水のありがたさを忘れず、水を守りながらこれから生活していきたい。この経験で得たことをむだにせず、次へ、未来へつなげていきたい。水の大切さを身をもって感じることでできた私たちだからこそ、できることはたくさんある。災害、断水を経験していない人たちへこの世界にあたり前などないということ、私たちの経験したことを伝え水の大切さを広げていくような、私たちにできる「役目」を果たし、身近なことに感謝し生きていくと誓った。